

コンピュータを取り入れたリーディングの授業

—学習意欲に結びつく可能性—

吉田 由美子

【キーワード】コンピュータ、学習意欲、コミュニカティブ

はじめに

今やコンピュータは教育の場に広く行き渡り、コンピュータスキルを身につけることを目的とする直接的な授業はもちろんのこと、何らかの形で授業に取り入れられている。すでに、コンピュータ教室及びCALL教室の導入も進み始め、大学入学以前までに、コンピュータ教室での授業を受けたことのある学習者が多勢を占め、入学時に初めてコンピュータの操作指導をするということは、極めて稀なケースになったといえる。その一方で、各自のコンピュータリテラシーの差が激しく、基準をどこに設定して授業を行うのか、その差をどのように埋めて授業を展開するのかということが、指導する側の重要な課題となっている。また、授業中のコンピュータのトラブルに教員一人では対応しきれない、という教員側の問題も生じている。このような一定した条件が整っていない段階で、どの程度コンピュータをはじめとしたマルチメディアを導入した授業が、可能になるのだろうか。

以前、マルチメディアと英語の授業に関するアンケートを行った際、「機械ではなく、教員とじかに接することのできる授業をもっと増やして欲しい」¹、という回答があった。英語力を身につけたい学習者の中には、機器の導入も良いが、機械だけではなく、教員から直接指導を受けたいと考えていることもあるということである。実際に、コンピュータを利用したクラスを受講した学生に授業の感想をきいてみると、「良かった」「効果的」と答えた学生は一人もいなかった。その理由は、「友だちと話すこともないし、コミュニケーションがない」「何をしてもフィードバックがない感じがする」といったものであった。学習者の要望にはこたえたいものの、クラスサイズや授業時間を考えると、一人一人の質問に答えて、細かいところまで指導する授業を行うことは不可能である。学習者のアナログ的な要望に対し、言語教育の現場ではデジタルな環境を整えていく方向に向かっており、その開きをどう埋めるのか、埋めることができるのか、ということが大きな課題だと思われる。

コンピュータ利用の目的

今回、別科クラスの中で、コンピュータを利用してみようと考えたのは、同じ時期に学部で担当していた英語学科1年生のポキャブラリー・ビルディングの2クラスと関係

する。この2クラスは、教室の希望を出したところ、運良く学内に一つあるCALL教室を利用することができた。英語教育では、マルチメディアをどのように授業に活かすことができるのか、ということもよく取り上げられており、いろいろな実践例が報告されている。この機会に、その実践例を参考にした授業をすることができると思った。

しかし、前述したように、すべての学習者が充実した学習環境であるCALL教室において授業を受けることができる可能性は、その設置数からみてまだ十分だとは言えない。つまり、授業方式についてもまだ考えなくてはならない問題が数多くあると思われた。またCALL教室ではLLの機能は使うことがあっても、コンピュータをどの程度取り入れていくかについては、教員のコンピュータリテラシーにも関わるので、ここにも差が生じる。別科クラスは、留学生だけのクラスであるため、英語学科のクラスとすべて同じ問題が生じるとは言えないが、少人数クラスであるがゆえに、通常の30人程度のクラスよりもずっと早く学生からの意見や要望を聞くことができ、その対応も早めに行えるのではないかと感じた。

少人数クラスの別科の授業の中で可能であることを通して、どのようなことがコンピュータを使ってできるのか。また注意すべき点はどのようなことなのか。別科クラスの授業をベースにして、効果的にコンピュータを活用するには、どのようなアクティビティの可能性があるのかを考えてみることにした。

授業実践

留学生だけで構成される別科クラスで、コンピュータを利用する大きな理由は、コミュニケーション・ツールとしての役割である。程度の差はあるが、英語に対する多少の知識は持ち合わせていても、日本語をこれから学習していく学生との間に、前期の段階では共通の言語が存在していない。コンピュータを **visual aids** として、授業を効率よく進めるため、およびクラスの雰囲気を変えるためインタラクティブな授業に利用できないかと考えた。

担当したクラスは、2004年度は中国人学生10人、2005年度が中国人学生4人、トンガ人学生1人であった。2004年度と2005年度のクラスでは、クラスサイズが違うこと、たとえ一人であっても出身が違う学生がいることで学生同士のコミュニケーションも変わり、クラスの雰囲気がだいぶ違ったといえる。2004年度と2005年度の授業中、コンピュータを利用して行ったアクティビティを比べてみると(表1)、それぞれのクラスの英語力・コンピュータリテラシーはもちろんのこと、クラスの雰囲気やクラス構成などの要素も影響して、授業で取り扱うことのできるアクティビティを変えることになった。

2004年度は、初めての授業ということもあり、留学生にどの程度のコンピュータリテラシーがあるのか予想することもできず、コンピュータの操作方法から説明するつもりでいたが、実際に授業を始めてみると、英語学科1年生よりもずっと操作には慣れており、初歩的な操作に関しては一切説明する必要がなかった。また、クラスに日本語を理解する学生と、英語力の高い学生とがいたので、ファイル提出などの学内で必要な操作に関してわからない場合は、中国語での補足説明を頼むことができた。

このクラスは、中国人留学生だけのクラスということもあり、非常に協力的で、操作にとまどっている、指示内容がわからない、といった学生が一人でもいると、近くの学生が助けていた。そのため、課題の途中でわからなくなってしまう学生もいなければ、課題提出が遅れるということもなく、全員が同じスピードで授業を受けていた。

どのような授業を展開するかは、前年までの授業例を引き継ぐと、リーディング中心で、授業中の言語は英語で授業をするということになった。通常担当している科目では、教師主導型の授業を試みたことはなかったが、リーディング主体の授業であれば、多くの場合教師主導型になると思われる。ただ、日本語をこれから学ぶ学生たちには、和訳する時間はとれないので、英文を読んで内容を理解するだけにならないよう、テキストには練習問題が多く、文法解説のあるリーディング教材を選んだ。

表1. 2004年度、2005年度の授業内容の比較

	2004年度	2005年度
人数	10名	5名
テキストの主な目標	リーディング 文法	リーディング
授業中のアクティビティ (コンピュータ利用)	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の聴き取り ・タイピング ・小テスト ・DVD鑑賞 ・練習問題 ・レポート 	<ul style="list-style-type: none"> ・歌詞の聴き取り ・小テスト ・DVD鑑賞 ・練習問題 ・日本語入力の指導 ・レポート ・インターネット検索 ・スライド作成 ・プレゼンテーション

しかし、授業を始めてみると、習ったばかりの日本語を使って、コミュニケーションを積極的にとろうとする学生が数人いて、教師主導型の授業は向いていないと即座に判断することになった。そこでまず取り入れたのが、Warm upに音声を聴くことであった。これは、学部の授業でWarm upに行っていることで、5分程度の曲をかけ、歌詞の空白になっている箇所にあてはまる語を入れるものである。コンピュータを利用していないクラスで取り入れる場合は、空白が入っている歌詞のハンドアウトを配布し、そこに書き込む形式だが、コンピュータ教室なので、その利点を使った。あらかじめ、別科クラス用のフォルダに空白の入った歌詞のファイルを入れておき、学生は読みとり専用のそのファイルを開き、新しいファイルにコピーして空白に入力し、自分の好きなように保存できるようにした。この時の選曲は、英語学科の学生がしてくれたこともあり、同世代の日本人学生が好む曲ということで好評であった。

コンピュータ操作が十分できる学生でも、指づかいが正しくないので、練習の経験を尋ねたところ、タイピングの練習は一度もしたことがないということだった。そのた

め、タイピングソフトウェア²を使用した練習も Warm up として前期の授業に取り入れた。

小テストは、テキストに含まれていた、いくつかのチャプターの要点をまとめた復習形式のものを使用した。テキスト上では行わずに、タイピングの練習を兼ねて問題文もすべて入力するファイル形式にした。

使用したテキスト³の構成は、各チャプターに取り上げられている文法事項を含んだ400ワード前後の文が最初にあり、内容理解、文法の練習問題となっていた。本文を逐一日本語に訳すことはできないので、音読も含めて英文を読むことに重点をおいた。ただし、学生からの要望があったので、後期の授業の2、3回の中で、一文、二文を日本語に訳すことも扱った。本文の内容が事実に基づくことであったので、学生が興味をもって取り組むことができ、テキストはほぼ計画通りに進めることができた。

テキストを順調に進めることができるので、授業に他の要素を取り入れたいと思い、学生の意見を聞いたところ、「映画を観たい」という声が多く、英語学科の学生が鑑賞したのと同じ THE CHAMP⁴を英語の音声、中国語の字幕で、15分ほどずつ8回に渡って流した。この映画を選んだ一番の理由は、授業中に使用していたDVDの中で唯一中国語の字幕があったためである。また、ストーリーがわかりやすいこと、子役の英語が短くわかりやすいので、聞き取りとしても使えることも、授業中に使用する映画としてふさわしいものであったと言える。毎回必ず子役が登場するシーンがあるので、子役の使った会話表現を5つ以上聞き取ることを課題にした。それをワープロのファイルに入力していき、提出するようにした。この聞き取ったものについては、あとでまとめて日本語の解説を加えたが、子役の発言であり、実際に聞き取ることのできた英語の難易度が高くなかったため、日本語であっても理解することができたようである。後期の映画には、同じく子役が登場する Stuart Little⁵を使った。この場合も同じように聞き取りの課題を出したが、字幕なしで英語の音声だけにすることを主にしながら、たまに英語の字幕を入れて鑑賞することでもしてみた。英語の字幕を観ることも、ストーリーの展開を知る上でだいぶ役にたったようである。

初年度はすべてが手探りであったので、コンピュータを取り入れることがどの程度可能であるのかを、全く予想することができなかったが、実際には利用度が高かったと思う。テキストで取り上げられたトピックについての考えや、身近な出来事に対しての意見などを英語・日本語のどちらでもかまわないということにして、レポートとして提出する課題も出してもらった。学生たちの意欲とクラスの協力的な雰囲気も手伝って、予想以上に活気のある授業になったと思える。

2005年度のクラスは、2004年度のちょうど半分の人数になり、全く雰囲気の違うクラス構成となった。2004年度のクラスは男子学生が一人だけで、あとは女子学生ばかりのにぎやかなクラスであったが、2005年度のクラスでは、男子学生が4人、女子学生が1人で静かな雰囲気というのが第一印象であった。このクラスには、トンガ出身の学生が一人いたので、英語力に関しては前年度よりも開きがある構成であったと言える。2004年度に使用したテキストとは違うテキスト⁶にしたのは、リーディング主体のテキストではあるが、各章の最後に、本文に関連したインターネット検索の課題が一つあり、調

べたことを発表する形式となっていたためである。検索エンジンを使って調べることがすぐわかるように、テキストに検索画面が提示されていたので、学生に指示が出しやすいと思われた。このテキストの英語自体は非常にやさしいものなので、おそらくクラスの多くは、このテキストを簡単なテキストだと思ったことだろう。しかし、扱っている内容は現代社会における諸問題に関するものなどがあり、意見をまとめるには、自分の立場をはっきりさせておく必要があるものであった。

このクラスは前年度に比べて、学生が積極的に発言をすることがなく、指示することを黙々とこなすという感じであった。いずれその状態も、授業に慣れるにつれ変化すると思われたが、その様子はなく、インタラクティブな授業にはなりそうもなかった。前年度のコンピュータを利用したアクティビティを同じように取り入れたが、クラスの雰囲気を活気づける要素にはあまりならなかった。クラスサイズやその他の要素によって、同じアクティビティであっても、インタラクティブな授業にはなりえないことがわかった。

学生の積極的な活動が見られるようになった2つの方法は、日本語入力の指導とパワーポイントの使用であった。日本語入力の指導をした理由は、通常アルファベットで入力する時には、大して問題がなかったが、英文と和文を打つ練習をした際、日本語をローマ字入力し、漢字に変換することができずにとまどっていることに気がついたからだった。同じことが前年度も起きていたとは思いますが、日本語を入力する課題が極めて少なかったこと、教室の配置の関係で、学生の画面をすぐに見ることができなかったので、気づくことができなかった。この日本語入力の指導は、毎回授業の中で、少しずつ取り入れたが、学生の集中力と意欲が感じられた。

また、学生の積極的な態度を導き出せるのではないかと、web上のいろいろなサイトをスクリーンに映し、学生の反応を見たところ、日本語で映し出される、それぞれの出身の国の様子やそれに関わるサイトを、真剣に観ていることがわかった。ここにヒントを得て、課題として、「インターネット検索で自分の出身地をできるだけ詳しく説明すること」、を出した。この課題は、時間制限を設けずに、自分の出身地や知ってほしいことを、好きなだけ必要なサイトを見せながら話すというものであった。この課題は、想像以上にクラスを活気づけることになった。まず、発表する学生は自分に関わることになること、一生懸命に人に伝えようとし、聞き手も相手のことを知ろうとし、自然とコミュニケーションな状況が生まれた。このことから、学生自身に関係のある話題を投げかけていくように心がけ、「自己紹介を一度すればいい」というのではなく、何回か自分の感じたことを話してもらうようにした。また、学生がパワーポイントを使ったことがないので、スライド作成の方法を説明し、自分の好きなテーマで自分の思うことを発表させた。このパワーポイントを使用したプレゼンテーションは、後期の最後の授業で取り入れた。後期の最後なので、発表に使う言語は、日本語・英語のどちらでもかまわないことにした。これは、年間の授業を通して学んだことすべてを取り入れたものであり、学生自身が自ら調べ、作成し、発表するという総合的なまとめとなった。

まとめ

現在、研究しているテーマ⁷で、コンピュータを利用して勉強してみたいことを英語学科の1年生に尋ねたところ、インターネットの利用や音声の練習という答えが多かった。また自由記述では、会話表現につながるものを覚えたい、音声の練習をしたい、という意見もみられた。いわゆる、「話す・聴く」スキルを身につけたいということが、一番学習意欲に結びつくということのようである。しかし、音声のチェックなどは、教員が個別に行うことなどをしなければ、ただ情報を受け身で受け取るだけで、学生の積極性を判断するのは非常に困難である。また、コンピュータを使ってコミュニケーション的な授業をするためには、PC画面と向き合っている状態をコミュニケーションというのではなく、実際にいろいろなアクティビティをとりいれて、コミュニケーションにする方法を提案していくことである。

今回、二年に渡って別科クラスでコンピュータ利用によって授業を展開したことは、少人数のクラスであったが故に、ふだんの学部の授業において、忘れがちであったことや、今まで気づくことのなかったことなど、あらためて授業に臨む姿勢について、深く考えさせられるいい機会となった。通常の授業ではしなかったと思われる対応として、大きく分けて3つのことが挙げられる。1. 英語・日本語のどちらでも説明が伝わらないと判断した場合は、課題を多少変更するか、課題そのものを変更した。2. 英語力、コンピュータリテラシーには非常に差があるため、学生同士で協力しあって行う課題を増やした。3. 学習者との間をより身近にするため、お互いの自己紹介を二回以上行った。これらは、学習者だけでなく、指導する側の負担も軽減するという点で、非常に意味のあるものであったと思う。テキストを進めるペースは多少遅くなってしまったが、一つのことに対していくつもの可能性があるという余裕が生まれ、中途半端に終わることなく授業をすすめることができたと思う。

とにかく、教員は情報を学生に与えると、反応をすぐ求めてしまいがちだが、ある一定の期間まで待つことも非常に大切であることに、あらためて気づかされた。今後は、このように学生の声に耳を傾けながら、コンピュータを使いながらも、コミュニケーション的な授業になりうる可能性について、引き続きいろいろな側面から探していきたいと思う。

注

- 1 平成12年8月にまとめた、「清泉女子大生のコンピュータ利用への意識調査-授業への動機づけと授業展開への指針-」の結果による。
- 2 大東メニューにある、TypeQuickを使用した。
- 3 PRACTICE: Grammar トムソンラーニング
- 4 John Voight 主演。1979年。
- 5 ネズミが主人公の映画。1999年。
- 6 Adventures in reading Beginning マグロウヒル
- 7 2006年1月からの共同研究:「グループ学習によるマルチメディアを利用したインタラクティブな授業の実践」英語学科3年飯塚英司・松村祐一・山崎悠平との共同研究による、アンケート調査結果の報告